GAUDETE IN DOMINO

京都教区時報 カトリック

古屋司教認可
発行所　教区事務所
定価　一部　10円
予約　一年　100円

新年の言葉

京都教区長　古屋司教

第二ヴァチカン公会議の第二期総会は昨年十二月四日に幕を閉じ、私は十二月十五日になつかしい教区に帰って参りました。この度の公会議には、一昨年の時以上皆様の多くの祈りの賜物と又聖霊の指導のもとに大きな成果を収めることが出来ました。それは将来の新しい時代に即応した教会の発展をみることができたことです。教皇ポーロ六世は十二月四日第二期公会議の終りの日に全世界から集まった約二千三百名の教父を前に聖ペトロ大聖堂における公会議で、第二ヴァチカン公会議開始以来はじめて二つの公会議教令を荘厳に決定なさいました。

紙上御承知の如く、典礼に関する事項が多く取り上げられました事は信者一人〳〵が典礼を通して信仰を深め、神に対する愛を強めるためであります、即ち典礼がキリスト教信者の実生活にとけ込んで理想的な信者の生活ができるように考慮されたものであります。又、マスコミの問題に関しても神の光栄と教会の発展が信者各自の責任として取扱われております。

今回の公会議において特出すべきことは、平信者までが公会議に参列を許可されたことでありました。平信徒代表者の参列が認められたことはいまだかつて見られなかった取扱いであります。それは信者、聖職者が完全に一致して教会の発展のために尽さなければならないことを示しているものであります。

私達日本司教団が教皇様に面謁した際も、教皇様は東洋における日本国民の地位を高く評価されました。

又、教皇様は日本民族が文化的にも世界の最前線に立っている民族として、過去の長い伝統の中に培われたすばらしい自然道徳の気高さをも承知され、この好条件に恵まれた日本人がわずかな恩恵によっても超自然的生命に触れ、神の子キリストの兄弟となる素質のあることを認め先に召された信者各位が祈りと犠牲と立派な鑑をもってできるだけ多くの人々に神の愛のよろこびを分け与えるように努力することをお願いになりました。そして又互いに理解し合い、信者同志ばかりでなく、すべての人達を神の子キリストにおける兄弟のつもりで親しみ愛し合っていくことを強調され、又信者達は司教、司祭達と一致し助け合い真の幸福と平和を楽しみつつ一人のこらず天国への旅を続けるよう心からお祈りすることを約束なさいました。教区に帰ったならば御自分の名においてすべての信者一人ずつに特別の祝福を与えて下さいとおおせられました。

第二ヴァチカン公会議はまだ終ったのではなく、今年九月十四日から第三期公会議が開かれることになっており、今も小委員会が続けられております。信者の皆様はこの公会議の成果のために続けて祈るように心から願つております。私も今皆様の熱心なお祈りと又多くの犠牲を心から感謝し、新年にあたって皆様と又御家族の方々の上に神様の豊かな祝福を心からお祈り申し上げます。

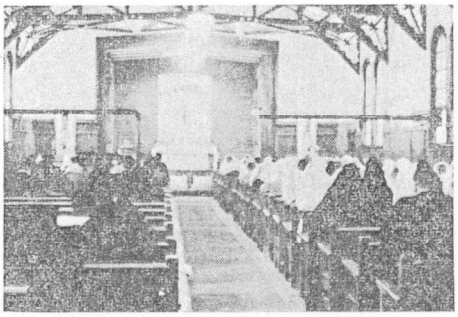
教皇パウロ六世聖下と歓談される司教様方

レジオ・マリエ年次総会

十二月八日（日）聖母マリア様の無原罪の御やどりの祝日に当って、西陣教会でレジオ・マリエ京都コミチウムの年次総会が開かれた。当日は時雨があったにも拘らず、大勢の会員が参加した。

総会は二部に分けられ、第一部は聖堂において、午後三時から始められ、徳久神父様による「開会の祈り」とロザリオの祈りが聖母マリア様に捧げられた。続いてアロクチオを丸山神父様がして下さった（内容は別稿）。その後ダフィ神父様司式の荘厳ベネディクションがささげられて、午後四時すぎ第一部を終了した。

第二部は、青年会館の方へ会場を移して、「カテーナの祈り」に始まり、コミチウム会長から本年度の統計報告がなされた。次いで、レジオ会員による歌合戦、ゲーム、寸劇ジェスチァ等に興じ、「終了の祈り」、レジオ・マリエの歌、列席の神父様方の祝福をもって、午後五時すぎ解散した。



ロザリオの祈り

レジオ年次総会アロクチオ

丸山神父

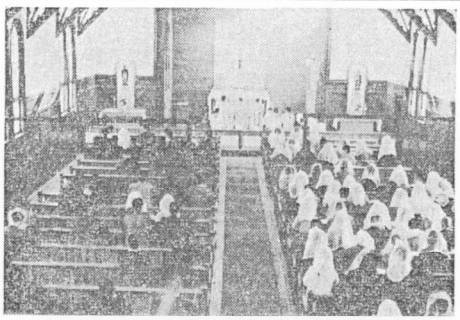
「聖父の完全なる如く、汝等もまた完全なれ」とのイエズス様の至上命令に従って、私達信者は皆、完徳に達する必要があります。然し、レジオ会員はもっと特別な意味で、完徳に召されているといえるのです。それは、人々に教え、その人をしてイエズス様を愛させるという使命があるからです。教える為には先ずその教えをよく知らなければならないように、愛させる為には先ず自らがイエズス様を愛さなければならないのです。即ち、先ず自らが神様と一致していなければならないのです。その為に必要な手段として祈りと労働とがあります。聖ベネディクトは「祈れ且つ働け」と申しました。

或る人は「人間とは祈る動物である」といっております。確かに人は祈る時、神を知り、神を愛し、己自身を知るのです。そして祈る人のみ、人の本当の幸福を味わう権利があるのです。イエズス様は、人間として祈りの必要なことを痛感され、屢々終夜お祈りになり、私達に祈る手本をお示しになりました。祈りの生活は人を深め、祈らないならば、人生の正しい道から脱落し、心の落付きを失って失敗するのです。仕事はやれば、それだけ実績や結果が目につき、祈りは真面目にしても霊魂への好結果が目立たないために、仕事を先にして、祈りを後廻しにする傾向があります。この状態が長期間続くと霊的貧血状態に陥り、やがて神様への奉仕が窒扼になり、重荷となって、霊的に枯れて参ります。私達レジオの仕事も、もし神様との一致のうちにしないならば、死んでしまったものとなるでしょう。

次にまた、精神的に、肉体的に働く事も大切です。労働は神様への奉仕の心で行なう時、祈りと同じ価値を生じ、忠実に行なう時、祈りの不足を補うのです。そして凡ゆる悪の源である怠惰を追放し、完徳への憧れを私達にもたせます。また、心身を緊張させ、心身の力を養わせます。従って、勤勉で、良心的な働きはよい霊的環境を醸し出すのです。イエズス様を始め、聖母マリア様も働かれました。聖パウロも布教の傍、生計の為に天幕つくりを致しました。また聖女クララは最期の病床にあっても祭服の布を織っておられました。聖ボナベンツーラは、神学研究の傍、労働修士と共に炊事等をなさっております。

祈りの心を養う為には、楽な仕事ではなく、犠牲と克己が伴いますが、時には苦しい仕事を選ぶ必要があるでしょう。確かに祈りと労働とは相補うものであり、犠牲と克己の後に初めてよく祈ることが出来るのです。

祈りと働きに精を出す時、人間的にも完成し、信仰的に向上し、人々に愛をそしてイエズス様をもたらし、共に天上の喜びに満されるでありましょう。



荘厳ベネディクション

MEDITATION OF THE MONTH

THE HOLY FAMILY

The Holy Family is the model family for every other family in the world. And It is THE model family because It was a holy family.

Every other family in the world that wishes to become at the same time a holy family and a model family must of necessity imitate the Holy Family.

月の黙想

聖家族

聖家族は世界中のすべての家庭の鑑（かがみ）であります。それは聖なる家庭だからです。

世界中のすべての家庭が聖なる家庭であると同時に模範的家庭となる為には、聖家族に倣わなければなりません。

洛星の生徒諸君へ

ピジョン神父

ピジョン神父
（修道院裏庭）

親愛なる諸君、京都に僅か二週間の滞在で斯くも大きな、美しい国を知る事、またその国についての印象を書く事は、私にとって本当に難しい事なのです。特に日本語の出来ない私は個人的に多くの人々と接触する事が出来ません。幸い通訳のお蔭でいくらかの人々と話したり、父色々な物を見て歩く機会を得ました。それでも日本に来る前から、少々日本に就いて読んだり、又聞いたりしましたので自分の目で見る京都は、それが良く思い出されていっそう興味深く親しく感じられました。

京都の静かさ美しさにはカナダや米国に見る事の出来ない魅力があります。私は古いお寺や庭園を見ました。その静かな環境は日本人が自然の優雅さを愛し、黙想的なものを好む国民である事も知りました。庭園の植木、花、また自然のままに置いてある石も本当に印象的です。これは皆日本人が知的であり、活動的であり、心遣いの細かい優しい国民である事を示し、日本の発展の原因をなしているのではないかと思われます。

私が日本に来た第一の理由は、諸君の学校である洛星を見る為であります。それで諸君の学園活動を叫て、心から希望が持て喜びを感じています。例えば運動会、文化祭の準備は、諸君の不断の活動の応用であり、それが如何に知的、肉体的発展の為に、活発であったかも知る事が出来ます。

日本の大学に入学する事が、如何に難しいかも知っています。同時にその事が諸君に良い刺戟を与えている事も知っています。それが諸君の将来に対する偉大な希望を与えるものと私は思います。その為に諸君等が、如何に良く準備しているかも私は知りました。それは諸君自身の為です。又それは、同時に洛星という学園の為でもあります。

私の希望は、諸君が益々高い知的道徳的水準を保つ様に努力する事です。それは先ず、諸君等自身の為です。諸君等が洛星を希望したのは、洛星において高い知的、道徳的水準を得る事を自分が知ったか、御両親により知ったと、信じます。それで益々諸君等は智徳を得る様に努めなければなりません。又諸君等は、日本文化という高い文化の子孫であり、この文化を益々発展させる様に励むべきです。それは他の事でなく、上記の様に知的開発意志の強さと肉体の健康であり、この平均の保たれた若人である事です。これこそ若人の崇高さです。

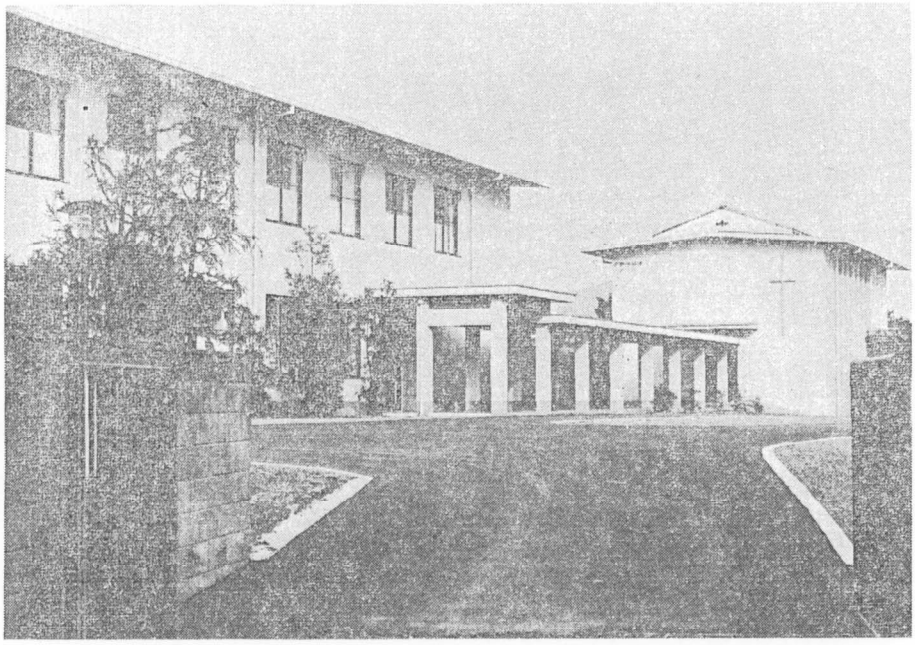
私達ヴィアトール会員である司祭、ブラザー達、立派な教師達、また諸君等の将来を希望している御両親は、皆崇高な若人を造る為に努めているのです。私達カトリックの教義は諸君等の希望を照らし、導く様に努力しています。科学的な面において若い諸君の難しさを助け諸君等の希望に対して最大の事を与える様諸先生達は努力しているのです。

又御両親は諸君の発展の為に犠牲も惜しまず学園を信じその発展の為に協力して居られます。此れは益々将来の発展を示すと思われます。

私は此等全ては諸君等が此の学園に協力している事であると感じ、他方私達も益々諸君等の為に努力する奮発心を得、日本人に対する愛着心を益々強く深くしてくれます。此れこそ益々洛星の発展、偉大な学園史を造る源であると思います。

ヴィアトール会員

河原町教会黙想会



「われわれの教会はあまりにも偉大すぎるのであろうか？　二千年の歴史と巨大な組織の前に立つと、真面目な平信者は萎縮してしまい、本当の自分を見失ってしまうのではないだろうか？」

十一月二十五日と二十六日の両日、河原町教会での黙想会において説教を担当された大阪教区の、大園神父はこのような問を投げかけられた。

この黙想会は毎年この時期に、河原町教会の全信者が、待降節を前にしてよい準備ができるように行なわれるものである。朝六時半のミサの後七時から三十分の説教、つづいてミサがあり、夜は六時半のミサの後七時から一時間弱の説教につづく、聖体降福式をもって終る。この時間は主として勤めに出る人を対象にしているので、別に家庭の人々のためには、朝八時半からミサと二回の説教が行なわれた。

冷え込みの強い季節にもかかわらず多数の信者が参加し、両日とも毎回二百名程の参加者が見られた。信者として要求される最低の生活を、消極的な態度で何とか過ごしている者にとっては、背骨のズイをゆすられるような説教であった。その要旨は次の三点にまとめられる。

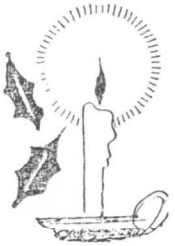
一、世間ではすぐれた能力をもった人々が、どうして、その能力を信仰生活にうつそうとしないのか。何百人、何千人の従業員を動かすことのできる会社の経営者も、すぐれた頭脳をもつ大学教授も、教会の仕事と云えば、ビラ配りしかしないようなカトリック・アクションに反省が必要なのではないだろうか。教会に来れば即座におとなしい羊になってしまうのではなく、自己の能力を積極的に信仰生活に翻訳することを考えよう。

二、信仰生活が、われ〳〵の全生活に対応しているだろうか。一週間のうちの一時間か二時間だけが信仰生活で、その間は、他の実生活から遊離したムードの世界になっているのではなかろうか、感傷的でキレイな御像や聖歌のかもし出すムードの中に逃げ込んで、その場だけでも、ほんとうの生活を忘れようとしているのではないか、キレイゴトだけでなしに、われ〳〵の全生活を信仰の生活と一致させよう。

三、信仰がわれ〳〵の生活に力を与える源になっているだろうか。われ〳〵はどうかすると、自分の信者であることを人の前で恥かしいことのように考えたりしているのではなかろうか。この点では、他の宗教の信者にくらべて劣っている点があることを率直に認めねばならないだろう。少くとも日常聖書に親しみ、その中の言葉を自分の生活に生かしてゆくことを努めてみてもよいのではなかろうか。

以上のように、この黙想の主題は積極的で能動的な信仰生活を要求するものであった。われ〳〵はともすると、信者であることが天災ででもあるかのように思うことがある。雨風を防ぐための最小の対策はとるが、それ以上のことはしないで、首をすくめてやり過ごそうというわけである。何故こんな態度が生まれて来るのか、大きな反省が必要であろう。

二日間の黙想は、このような反省のための手懸りと勇気を与えてくれるものであった。



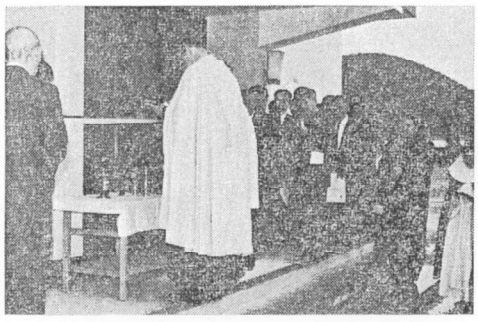
神学生の召出し

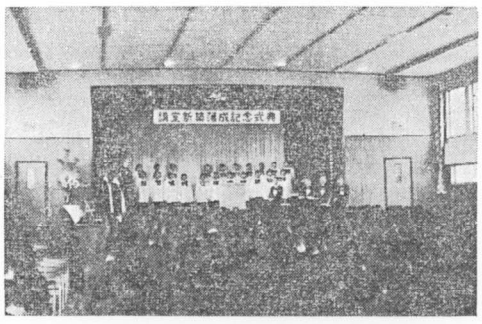
本年度、全日本カトリック統計（カトリック新聞十一月十日付発表）によると、聖職者の増加は順調であるが、神学生の数がやや減少しつつあると発表されている。京都教区においては、大神学生十三名、小神学生七名であるということは、未来の京都教区発展の為に満足すべきものではない。召命に対する信者のより一層の祈りと、関連事業への協力が必要である。近日中に教区小神学校より、召命に関する詳しいパンフレットが発行されることになっているが、召し出しについて信者各位がより真剣に考えるべきであろう。司祭の召し出しについて詳しいことは、カフリー神父まで連絡をとること。

喜びの落成式

―聖家族女子高校―

聖家族女子高等学校の講堂が落成し、十一月三十日(土)午前十時からその祝別祝賀式が行なわれた。式の次第は次の通りであった。先ず、園部教会主任司祭エイルワルド神父様の司式で祝別がなされ、続いて感謝のベネディクションがささげられた。次いで、校歌斉唱、同校合唱隊による「アヴエ・マリア」、「サルベ・レジナ」の聖母賛歌が歌われ、シスター・アヌンシアタ広瀬校長の式辞、上妻同校理事長、エイルワルド師の挨拶、野中園部町長はじめ各方面からのお祝いのことばが贈られ、正午すぎ閉式した。





尚、同講堂は、ローズ・オブ・メリー・ホールとも呼ばれ、総工費千二百万円、広さ四百平方メートル、鉄筋造りで、ステレオ方式の放送設備、ピアノ等近代設備が完備し、今後同校の中心的役割を果すことになる。

また、同校では、同ホール完成を記念して十二月一日（日）第一回全丹波地区中学校英語暗誦大会が開かれた。（別稿）

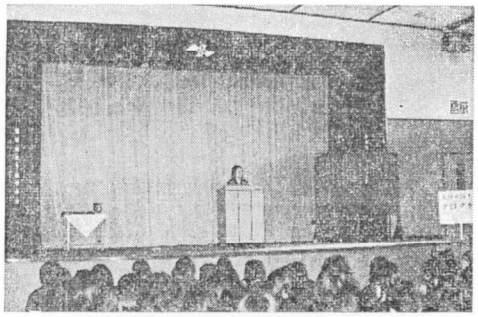
写真は（上から）祝別式　合唱隊による聖歌合唱

ガール・スカウト結成式

—京都府第六団—

聖家族女子高校生十三人でガール・スカウトが結成され、京都府第六団上級スカウトとして発足することになり、その発団式が十二月八日(日)午後一時半から同校新講堂で行なわれ、二人のリーダーと十一人の隊員が晴れのスカウトとして門出を祝福された。

団長の小林教子（三年）をはじめ制服に身を固めた隊員は、ホール正面につくられた聖火台のローソクに一本ずつ点火し、挙手の礼をとりながら「名誉にかけて、神と国とに対するつとめを行ない、何時も他の人々を助け、ガール・スカウトの掟を守ります」と誓い、京都府支部西村主リーダーから一人ずつ登録証を授与された。続いて、野中園部町長からのお祝いと激励のことばが贈られ、小林団長がお礼のことばを述べ、最後に、連盟歌を斉唱して、厳粛な式を終った。



英語暗誦大会の風景

BS結団式

—桂教会—

10月27日王たるキリストの祝日に当たり、桂教会においては、BS日本連盟京都第48団の結団式が行なわれた。同教会のBSは昨年4月より河原町教会に所属する京都第14団の一隊として発足し、各種訓練活動を続けて来たが、この度、4人のリーダーが誕生したのを契機として独立することになった。

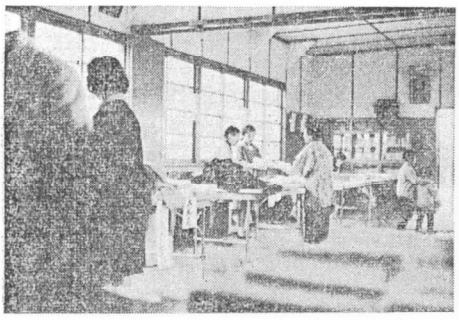
当日式は午後六時より始められた。BS京都府連盟理事長、洛西地区委員長その他BS関係の役員、友隊のスカウト、当教会信者多数参列する暗闇の中を、江口隊長によって親火が点火された。次に、誓い、掟を誦えるスカウト達によって献灯式が行なわれた。スカウトの精神をあらわすこの厳粛な光のもとで、理事長より団委員長岡神父の手に、日本連盟からの承認書が手渡され、直ちに団委員長より団委員および隊長、副長の任命が行なわれた。次に、新らしい団旗が祝別され、団委員長より隊長の手に授けられ、ここに第48団が結団された。

桂教会においては、既にGS京都第27団とブラウニー京都第2団が結成されていたが、新たにBSを加え、実にCS（カブスカウト）の準備中でスカウト活動が活発に行なわれている。

英語暗誦大会

—聖家族女子高校—

十二月一日（日）午前十時より、京都新聞社、京都女子大学後援で、第一回「全丹波中学校」（口丹波一市二郡）英語暗誦大会が前日祝別された聖家族女子高等学校講堂で開かれ、園部中学校、兵庫県城東中学校等九中学校二十一名が参加し、日頃の勉強の成果を披露した。この大会はシスター・アヌンシアタ広瀬校長の挨拶に始まり、審査員の紹介があり、次いで同校小川美代子（三年）、森本房子（一年）の二人の司会でなされた。出場者は、日頃の実力を充分に発揮し、健闘接戦の末、南桑田中学校平田富子さんが晴れの優勝を飾った。午後、表彰式に移り、審査委員長園部教会主任司祭エイルワルド神父様の講評のあと、京都新聞社寄贈の「優勝楯」が贈られた。〔一位＝平田富子（南桑）、二位＝数井真理子（亀岡）、三位＝川脇清枝（高田）〕



衣笠教会の小バザー

十二月八日（日）午前十時から午後三時まで、衣笠教会において、「小バザー」が行なわれた。当教会では、今夏に本格的な恒例バザーが催されたが、今回のは、新しく出来る小山教会の為のバザーで、伝道館一室を会場として開かれた。小バザーとはいえ、また大変寒い時期だったにも拘らず大勢の人が集まった。

教区献金のお礼

—教区事務所—

この度、第二ヴァチカン公会議に出席される古屋司教様の為に、信者の皆様が教区の為奮って献金して下さいましたことを厚くお礼申しあげます。総額六十九万五千八百三十一円集まりました。司教様のローマ便りにも述べられておりますが、教区事務責任者より重ねて感謝の意を表わすと共に、今後とも教区の発展の為にご協力をお願い致します。

京都教区青年会

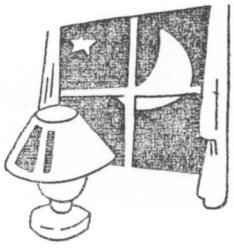
「スポーツの日」

九月二十二日（日曜日）前日から心配された空模様も快晴の天気に恵まれ、第一回京都教区青年会の「スポーツの日」が洛星グラウンドで行なわれた。午前十時講堂においてミサがシールズ神父様によって捧げられ、約七、八十名が与かった。

引き続き午後十二時半から全員講堂に集まり、キーン神父様の祝福をうけ、その後各自好きな球技（卓球・テニス・ソフトボール・バレー）に興じた。これらのゲームの進行は各教会役員二名によってなされた。各種のゲームは試合ではなく京都教区内各教会の青年達が一緒になってスポーツを思う存分楽しみ、それを通してお互いに親しくなり、今日一日を有意義に過ごそうというのが目的である。

午後からはぞくぞく男女青年が押しかけ、約二百名ぐらいが指導神父様と共に各種の競技に四時頃まで参加した。

この日青年達よりも神父様達の方が楽しんでいるように見える場面もあった。午後四時すぎ全員講堂に集まり、キーン神父様の祝福を受け、解散した。



編集室より

教区時報を御購読下さっている方々、又、普及に御協力下さっている方々に心から感謝致します。今後引続き出版する為に一層の御協力をお願い致します。

宛　先

京都市中京区河原町三条上ル
下丸屋町
京都教区事務所内
教区時報係宛

○記事はニュースの他に美談、失敗談、質問、こぼれ話等もどしどし。
○原稿については紙面の関係上当方で取捨てることもありますが予め御諒承願います。
○各教会のクリスマス及び新年行事のニュースをお送り下さい。出来れば写真もお願いします。